

編 集 後 記

未だ新型コロナウイルス感染症の勢いが止まらない状況です。国内では1月に新型コロナウイルス感染者が報告されてから、今日（12月1日）に至るまで、感染者は14万人を超えました。杏林大学病院の医療現場においても命を救うために連日昼夜を問わず献身的な努力を続けている医師、看護師をはじめとする医療関係者の皆様に心から感謝いたします。

大学の方も感染者増大の状況を鑑み、今年は卒業式、入学式がやむなく中止となりました。キャンパスは閉鎖され、前期期間の講義はオンラインによる自宅学習となり、新入生は一度も大学に登校することなく、教員や同級生に出会えない中でオンライン学習に取り組みました。しかし感染者が低下した7月上旬、ようやく医学部では新入生（51期生）M1オリエンテーションが開催され、M1学生は初めて医学生として三鷹キャンパスに登校することができました（希望者にはオンラインによる参加も可としました）。私はM1担任教員としてこのオリエンテーションに参加しましたが、「今まで不安であったが、医学部に入学したことを実感できた」との学生の言葉に胸が熱くなりました。また期待溢れる真っ直ぐなM1学生の眼差しに対して、コロナ禍での教育研究体制への責任を強く感じ、より理解しやすいオンライン講義、学会出張の機会がない中での研究の向上について改めて考えさせられました。

さて、このような状況においても2020年杏林医学会雑誌は予定通り51巻1-4号をお届けすることができました。これは杏林大学ではコロナ禍に屈することなく医学研究が進展している証と考えられます。51巻の特集は「公認心理師」「放射線治療の進歩」「ここまできたがん免疫療法」であり、各特集において専門分野の最新情報を熱意を込めて執筆して下さった著者の先生方に心から感謝申し上げます。また51巻4号においては2つの特別対談が掲載されています。まず1つ目の特別対談は「医学部創立50周年を迎えて～杏林大学のこれから～」のタイトルで松田剛明副理事長と編集幹事である桶川隆嗣教授との対談であり、父兄アンケートに寄せられたご意見を参考に進められた対談となっています。対談では副理事長より三鷹キャンパスのグランドデザイン、特に「臨床につながる基礎研究」のためのリサーチセンターの建設など今後の50年を見据えたプランが紹介されています。2つ目の特別対談は「新型コロナウイルスと在宅医療について」のタイトルで太田雅也先生（医療法人社団 医真会 世田谷ホームケアクリニック院長、本学平成7年度卒）と桶川隆嗣教授との対談であり、コロナ禍における在宅医療の現状、問題点が議論されており、患者さんの尊厳を考えつつ、命を守ろうとご尽力されている太田先生の貴重なお話が掲載されています。51巻では上記特集の総説32編の他、原著論文5編、総説2編、症例報告4報と、いずれも昨年よりも掲載数が増加いたしました。杏林医学会の会員の皆様が興味深くお読み頂ける内容と思っております。

(M.I.)

編 集 委 員

(長) 桶 川 隆 嗣

阿 部 展 次	今 泉 美 佳	井 本 滋
岸 野 智 則	照 屋 浩 司	長 島 文 夫
長 瀬 美 樹	根 本 康 子	森 秀 明
渡 邊 衡 一 郎		

杏林医学会雑誌 第51巻 第4号

URL : <http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/user/kyorinms>

令和2年12月25日発行

編集人 桶 川 隆 嗣

発行所 杏 林 医 学 会

東京都三鷹市新川6-20-2

杏林大学 医学図書館内